

人麻呂の表現意識

——「やすみしし我が大君 高照らす（高光る）日の皇子」をめぐって——

根 来 麻 子

はじめに

柿本人麻呂作歌には、「やすみしし我が大君 高照らす（高光る）日の皇子」という詞句を用いた歌が三首見られる（（一）内は、巻数・歌番号／対象）。

1 八隅知之 吾大王 高照 日の皇子 神ながら 神
さびせすと 太敷かす 京を置きて…

（巻一・四五／軽皇子）

2 八隅知之 吾大王 高光 吾日乃皇子の 馬並めて
み狩立たせる 若薦を 獵路の小野に…

（巻三・二三九／長皇子）

3 八隅知之 吾大王 高輝 日の皇子 敷きいます
大殿の上に ひさかたの 天伝ひ来る…

（巻三・二六一／新田部皇子）

1は、軽皇子の安騎野遊獵歌である。「冒頭からの八句、人麻呂は即位前の軽皇子を天武天皇に準じるものとして扱う。軽皇子を天武天皇の開いた王朝を継ぐものとして指定するのである^{（一）}」というように、軽皇子の皇位継承者としての正統性を主張するために、あたかも天皇を讃美するような当該表現が用いられたとする解釈が一般的である。

2・3においては、1と同様に大君讃仰の定型句とする理解^{（二）}が行われる一方で、にもかかわらず歌の対象となる長皇子や新田部皇子が天皇に準ずる地位にはないことが疑問視されてきた。それを解消すべく様々な解釈が試みられているが、その一つとして、吉田義孝氏は次のよ

うに述べる。⁽³⁾

彼女（筆者注：持統天皇）は、天武諸皇子を、政治や後宮関係の場から遠ざけることの代償として、かつて彼らが保有していた、皇嗣問題についての権利ないし発言権に最高の意義を認め、その榮譽を、天皇もしくは皇位継承者に準ずる仕方で讃え、またそれにふさわしい礼遇をおこなったものではなかったか。

（中略）「やすみしし我が大君 高光る日の皇子」という表現は、当時における彼等への処遇の在り方を象徴的にものがたるものといわねばならない。

氏は、皇子らの政治的立場をふまえた上で当該語句が詠み込まれている意味を解釈し、本来高い敬意を持つ賛辞を逆説的に天武諸皇子に用いたと理解されている。

当該表現は、人麻呂作歌以外にも万葉集中に五例の用例を見ることができ、そのうち四例が天皇、一例が皇子を指す。概して、対象に対する最高レベルの敬意を示す慣用句として理解されている。ただ、そうであるならば、なぜ人麻呂は天皇に対してこれらを用いていないのか、という疑問が生じる。人麻呂作歌における当該表現の対象はすべて皇子であり、天皇を対象とはしない。後述するが、「やすみしし我が大君」や「高照らす日の皇子」

を単独で用い、両者を重ねない表現も人麻呂にはある（三六・三八・一六七）。これらの表現は、持統天皇や天武天皇に対して用いられていることから、両者を重ねることと敬意の高さが、必ずしも比例するわけではないのではないかと推測される。

本稿では、人麻呂作歌において「やすみしし我が大君」と「高照らす（高光る）日の皇子」とをあえて重ねて用いるということが、どのような表現意識に基づいているものなのかを探りたいと思う。

一、「やすみしし我が大君」

1、「やすみしし」の表記と原義

枕詞「やすみしし」の「やすみ」は、万葉集における用例二十七例のうち、二十例が「八隅」、残り七例が安見（美）と表記されている。従来、前者の表記から「おほやけの八方をしろしめすといふ成べし」（『和歌童蒙抄』）と説かれていたが、真淵『冠辞考』がその説を批判し、「安らけく見そなはししろしめし賜ふてふ語をつづめて、安見知為といひて冠らしめたるにや侍らん」と、後者の用字を元にした解釈を提示した。原義をどちらに求めるかは諸説あるが、現在は、橋本達雄氏が説く

「八隅」説が有力である。氏は「やすみしし我が大君」の用例の制作年代を検証した上で、その上限を推古朝とし、「やすみしし」は道教の隆盛した推古朝に生まれた新しい枕詞で「八隅」を原義とすることを指摘し、「やすみしし」とは全世界を知らしめす意であるとされる。⁽⁵⁾

「八隅」という熟語が漢籍に見られることからすれば、全くの借字であるとは取りがたく、漢語「八隅」の語義とのかかわりを見るべきであろう。

漢籍における「八隅」は、「傍観八隅 周覽四垂」（晋 歐陽建「登櫓賦」『芸文類聚』卷六十三）のように八方の意に捉えられ、国全体、ひいては全世界を表す語であるが、なお次のような例も見られることが留意される。

華閣縁雲 飛陛凌虚 頽眺流星 仰観八隅……

（曹植「七啓八首」『文選』卷三十四）

宮殿の階段の様子を形容する箇所で、「仰ぎて八隅を観る」とある。「仰」ぐのであるから、ここで言う「八隅」とは天の八方を指すのであろう。国土のみならず、天上世界全体にまで言い及ぶことのできる語が「八隅」であるといえる。

類似する語として「八維」「八紘」などが挙げられる。

「八維」は『楚辭』王逸注に「天有八維、以成綱紀也」

とあるように天と地とが八本の綱で繋がれているとする考えに由来する語で、全世界を表す。「八紘」もまた同義である。「維」字は『廣雅』に「維隅也」とある他、『篆隸万象名義』『新撰字鏡』にも「維隅也」とあり「隅」と意を通じることから、「八隅」は、天上をも含み込む全世界を表す語として理解することが出来よう。

倭語「やすみ」の側から言えば、寛文版『文選』の古訓に、「八霊」の訓として「ヤスミノカミ」が見られる。

「八霊」とは、『楚辭』王逸注に「八霊八方之神也」（卷十六）とあるように、世界の八方にいる神のことを指す。このような「八霊」に「ヤスミノカミ」の訓があてられていることを傍証とするならば、「やすみしし」の「やすみ」は、やはり「八隅」の意を原義としていると見てよからう。「安見」の表記は、「やすみ」という倭語に「安らけくみそなはししろしめし賜ふ」（前出『冠辭考』）の意の用字を当てた拡大解釈と捉えてよい。「しし」の部分については従来諸説あつて定まらないが、その表記「知之」から推測される「知らす」、つまり統治するの意とする通説に従っておく。

2、人麻呂作歌における「やすみしし我が大

君」と「我が大君」との比較

では、人麻呂作歌において、「やすみしし我が大君」と、枕詞を持たない「我が大君」とはどのような相違があるのか。人麻呂作歌における「やすみしし我が大君」の用例は次の四例である（「高照らす（高光る）日の皇子」と共に用いられる三例については後述する）。

(1) 八隅知之 吾大王の 聞こし食す 天の下に 国はしも さはにあれども 山川の 清き河内と 御心を 吉野の国の 花散らふ 秋津の野辺に…

（巻一・三六／持統天皇）

(2) 安見知之 吾大王 神ながら 神さびせすと 吉野川 激つ河内に 高殿を 高知りまして 登り立ち 国見をせせば…

（巻一・三八／持統天皇）

(3) 神さぶと 岩隠ります 八隅知之 吾大王の 聞こしめす 背面の国の 真木立つ 不破山越えて 高麗剣 和射見が原の…

（巻二・一九九／天武天皇）

(4) 八隅知之 吾大王の 天の下 奏したまへば 万代に 然しもあらむと（一に云ふ、「かくしもあらむと」）…

（巻二・一九九／高市皇子）

これらの用例においてまず気づかれるのは、「やすみしし我が大君」の述部が、「聞こし食す 天の下」「高殿を高知りまして」「聞こしめす 背面の国」「天の下 奏したまへば」のように、統治や為政にかかわるものであるということである。(1)(2)の吉野讃歌では「やすみしし我が大君」はどちらも持統天皇を指し、天皇による吉野の国の統治を描く。(1)の波線部「聞こし食す」は「聞こし食す」四方の国より 奉る 御調の舟は」（巻二十・四三六〇）のように国を治める意を表す。また(2)の「高知る」は、一義的には宮を造ることを表すが、「神代より 吉野の宮に あり通ひ 高知らせるは 山川を良み」（巻六・一〇〇六）のような例から見ると、宮を拠点としてその土地を支配することである。(3)(4)は高市皇子挽歌で、「やすみしし我が大君」はそれぞれ天武天皇、高市皇子を指す。(3)の「聞こしめす」は(1)と同様治める意で、「天武天皇がお治めになっている背面の国」と表現する。また(4)の「天の下 奏す」は「万代に いましたまひて天の下 奏したまはね 朝廷去らずて」（巻五・八七九）のように、政務を執り行うことを示す。ここでも「高市皇子が天下の政をお取りになったので」と、為政にかかわる内容が示される。

これに対して、人麻呂作歌中、枕詞を持たない「我が大君」(二六七、一九六に二例、一九八、一九九に二例、二三九、二四〇)⁽⁶⁾は異なる傾向を示す。四例をあげる。

(5)：天皇の敷きます国と 天の原 石門を開き 神上り 上りいましぬへに云ふ、「神登り いましにしかば」 吾王 皇子の尊の 天の下 知らしめしせば… (巻二・一六七／草壁皇子)

(6)：天地の いや遠長く 偲ひ行かむ 御名にかかせる 明日香川 万代までに はしきやし 吾王の形見にここを (巻二・一九六／明日香皇女)

(7)：あさもよし 城上の宮を 常宮と 高くしたてて 神ながら 鎮まりましぬ 然れども 吾大王の 万代と 思ほしめして 作らしし 香具山の宮 万代に 過ぎむと 思へや… (巻二・一九九／高市皇子)

(8)：恐みと 仕へ奏りて ひさかたの 天見るごとく まそ鏡 仰ぎて見れど 春草の いやめづらしき 吾於富吉美かも (巻三・二三九／長皇子)

「やすみしし我が大君」との相違点として挙げられるのは、統治や為政を明示する述部を持たないということである。(5)は「天の下 知らしめしせば」と一見統治を示す語が表れるが、これは「もし天下をお治めになった

ら」という仮定の事柄であり、実際は皇子による統治は行われなかった。当該箇所はその未実現の事柄を通して皇子の死を哀悼する。(6)や(7)でも「我が大君」は皇子や皇女の死を惜しむ一文の主語として据えられており、彼らを統治にかかわる者として讃えるのではない。(7)は「作らしし 香具山の宮」と続く。香具山の宮は高市皇子の居処である。宮を「作る」と表現することは、「我が作る 日の御門に」(巻一・五〇)「寒き夜を 息むことなく 通ひつつ 作れる宮に」(巻一・七九)のように宮を造営する臣下の側から歌われる例もあり、統治することとは異なる。(8)もまた、「我が大君」は「春草のように親しみ深い」として、長皇子への親愛の情を示す文脈の中に現れるものである。

このように、人麻呂作歌における「やすみしし我が大君」と「我が大君」とを比較したとき、それぞれのとる述部の内容が異なっていることが分かる。すなわち、統治や為政にかかわる営みについて言うときは「やすみしし我が大君」が、対象への愛惜や親愛を示すための文脈では単独の「我が大君」が用いられており、「やすみしし我が大君」と「我が大君」との間には、使い分けの意識が看取できる。ここで取り上げていない五例において

も同様である。「やすみしし」は、枕詞として単に「我が大君」を引き出す役割を担うのみならず、「八隅知之」という用字にあらわされるように、統治者としての大君を讃えるために冠されているとみてよい。

3、人麻呂以前・以降の「やすみしし我が大君」

このような使い分けの意識は、人麻呂以前・以降の例には見いだしにくい。まずは人麻呂以前の用例として、古事記歌謡中の四例（二八、九六、九七、一〇三）、日本書紀歌謡中の四例（六三、七六、九七、一〇二）、万葉集人麻呂以前の四例（三、一五二、一五五、一五九）をみる。

(9) 夜須美斯志 和賀淤富岐美の 朝とには い倚り立
たし 夕とには い倚り立たす 脇机が下の 板に
もが 吾兄を (古事記下巻・一〇三)

(10) 野須美矢矢 倭我於朋枳美の 帯ばせる ささら
の御帯の 結び垂れ 誰やし人も 上に出て歎く

(日本書紀卷第十七・九七)

(11) 八隅知之 和期大王の 恐きや 御陵仕ふる 山科
の 鏡の山に 夜はも 夜のことごと 昼はも 日
のことごと 音のみを 泣きつつありてや ももし
きの 大宮人は 行き別れなむ

(万葉集卷二・一五五)

(9)の古事記歌謡の例は、春日の袁杼比売が雄略天皇に応えて詠った「大君の脇息の下の板になりたい」という相關的な内容であり、天皇の統治者としての側面を取り上げるものではない。日本書紀歌謡の例である(10)も、「天皇が身につけていらつしやる細紋の帯が垂れているように、誰かが悲しみを顔に出して嘆いている」という。一夜を共に過ごした勾大兄皇子との別れを嘆いた春日皇女の返歌である。統治主体として皇子を讃仰するものではない。この他の記紀歌謡六例も同じことが言え、また万葉集人麻呂以前の用例でも同様である。(11)の天智天皇挽歌を例にあげて言えば、一首は「天智天皇の恐れ多い御陵にお仕えする、その山科の鏡の山に」と亡き天皇への思慕を詠むものである。人麻呂以前の用例には、統治にかかわる「やすみしし我が大君」の例がなく、天皇の政治的な側面に主眼をおくのではない場合の主語にも、「やすみしし我が大君」が用いられるのである。人麻呂以前には、枕詞を持たない「我が大君」単独の用例が見られないため比較はできないが、人麻呂作歌の「やすみしし我が大君」とは明らかに異なる性格を示している。「やすみしし」は「大君」を修飾する枕詞として用いら

れるまでであり、その語義を前後の文脈とかかわらせるものではないことが分かる。

第三期・第四期の代表歌人である山部赤人、大伴家持の用例を見ても、「やすみしし我が大君」と「我が大君」の間に明確な使い分けは見られない。

(12) 安見知之 和期大王の 常宮と 仕へ奉れる 雑賀
野ゆ そがひに見ゆる 沖つ島 清き渚に…

(巻六・九一七)

(13) 八隅知之 和期大王の 高知らす 吉野の宮は た
たなづく 青垣隠り 川並の 清き河内ぞ…

(巻六・九二三)

赤人の宮廷讃歌では、行幸という場において自然や景物をほめる中で当該表現が用いられる。用法としては(12)のように「常宮」を修飾する連体格として用いる場合もあれば、(13)のように「高知らす 吉野の宮」と統治にかかわる述語を伴うこともある。これに対して「我が大君」は、

(14) 天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく お
してゐる 難波の宮に 和期大王 国知らすらし 御
食つ国 日の御調と…

(巻六・九三三)

という一例のみで、内容は「やすみしし我が大君」を持

つ歌と同様、統治を示すものである。両者の相違点といえばこれらの語が置かれている位置のみである。「やすみしし我が大君」は、(12)(13)以外の三例を含めすべて冒頭に置かれている(「我が大君」は歌中)。赤人が「やすみしし」を用いたのは人麻呂のように文脈を意識したからではなく、「やすみしし我が大君」という伝統的な修辭を長歌冒頭に据えることによって、天皇への讃美を示すためであったと思われる。

家持には「やすみしし我が大君」が二例、「我が(こ)大君」が十例あるが、赤人同様、両者に使い分けの意識は見られない。

(15) …天地 日月と共に 万代に 記し継がむそ 八隅
知之 吾大皇 秋の花 しが色々に 見したまひ
明らめたまひ 酒みづき 栄ゆる今日の あやに貴
さ

(巻十九・四二五四)

(16) …あをによし 奈良の都に 万代に 国知らさむと
安美知之 吾大皇の 神ながら 思ほしめして 豊
の宴 見す今日の日は もののふの 八十伴の緒の
…

(巻十九・四二六六)

(15)は「孝謙天皇が秋の花を色とりどりのままに御覧になり愛で、酒宴をして栄えておいでである今日の、なんと

貴いことか」と天皇の御代の繁栄を讃える。直接的に世界の領有という観点には言い及んでいないものの、肆宴の予作歌であり、君臣和楽の場を現出させて天皇統治をたたえる内容である。また(16)のように、「奈良の都で万代に国を治めようと、孝謙天皇が神であるままにお思いになって」と、人麻呂作歌同様、天皇を統治者として明確に描くものもある。

枕詞を持たない「我が大君」の例は、

(17) かけまくも あやに恐し 言はまくも ゆゆしきか

も 吾王 御子乃命 万代に 食したまはまし 大

日本 久迹の都は… (巻三・四七五)

(18) …知らし来る 天の日継と 神ながら 吾皇の 天

の下 治めたまへば もののふの 八十伴の緒を…

(巻十九・四二五四)

(19) 天地に 足らはし照りて 吾大皇 敷きませばかも

樂しき小里 (巻十九・四二七二)

などがある。(17)の安積皇子挽歌のように皇子の死を悼むものがある一方で、(18)のように天皇が「天の下治め」ている、と続くものなど様々である。(18)では、「神ながら」という天皇讚美の表現が用いられており、連綿と続く皇統を継ぐ天皇による支配を讃える点では、「やすみし」

を用いる場合と文脈上の大差はない。家持においても「やすみしし我が大君」と「我が大君」の間に文脈に即した使い分けは見られないといつてよい。

以上のことから、統治の意を持つ枕詞「やすみし」が文脈と関連を持つのは、人麻呂作歌においてのみ見られる傾向であることが分かる。

人麻呂の枕詞の用い方に独自性があることは、すでに澤瀉久孝氏に指摘がある⁽⁸⁾。澤瀉氏は、

i 当時すでに意味が不明になっていたものは、本来の語意にとらわれずに当時の人々に理解しやすいものとして再生させた。

ii 一首の声調を調えるために、字足らずの枕詞には助詞などを加えて五七調に合わせた。

iii 作者独自の景物など、簡明なものを用い、被枕との取り合わせを考慮して、芸術味豊かな枕詞の完成にとめた。

iv 一首の文脈に応じて、一つの言葉に対する枕詞数種を使いわけた。(分類は私に行った)

などの特徴を挙げ、人麻呂が従来の枕詞に手を加えていることを明らかにしている。また岩下武彦氏は、澤瀉氏の論を裏付けるかたちで「ひさかたの」「うまさけ」「わ

かくさの」の表記について検討し、人麻呂が歌の内容に即して枕詞の表記を使い分け、一首の構成の中に生かそうとする意図を持っていたことを指摘している。⁹⁾このような先行の指摘を併せて考えるに、人麻呂作歌における「やすみしし」という枕詞は、主体を統治や領有など為政にかかわる一文の主語に置く場合に用いられているといつてよからう。「やすみしし我が大君」は、対象人物を為政者という側面から称讃する機能を持っていると考えられる。

4、四句連続表現における「やすみしし我が大君」

このことは、「やすみしし我が大君 高照らす（高光る）日の皇子」という四句連続表現を持つ三首（四五・二三九・二六二）においても同様である。まず四五では「やすみしし我が大君」の「太敷かす都」とある。「太敷く」は「飛ぶ鳥の 清御原の宮に 神ながら 太敷きまして」（巻二・一六七）のように、世の中を治めることを示す語である。軽皇子は実際には皇位に就く前に亡くなっているが、歌の上では都を統治していると表現される。

次の二三九には統治を示す語句が明確には表れないが、皇子の遊獵において、宍や鶉までもが服従するとうたう文脈であることが注意される。「やすみしし我が大君」が用いられたのは、狩獵というものが、次に述べるように領有・統治を意味するからであろう。紀歌謡七五では、雄略天皇の狩において蜻蛉が天皇の腕を刺した蛇を食べたことを述べ、「はふ虫も 大君にまつらふ」とその服属を歌う。内田賢徳氏が「或る土地の占有を意図する者は、その先住の主を言向けねばならない。狩りは、そのための、言わば見えざる敵に対する闘争の擬態という儀礼性をもっていたと考えられる」「一方的な勝利と多くの獲物は、儀礼性の、農耕から征服への転化のあとを示すと言えよう」と述べられるように、狩りの場とは天皇の権威を顕示し周囲の服属を示すものであったととらえられよう。¹⁰⁾二三九において、狩獵における獲物たちの服従を歌うのは、その土地の支配者としての皇子の姿を描出するものといえる。

次の二六一には「敷きいます 大殿」という表現がある。当該歌での「敷きいます」については、『萬葉集攷證』や『萬葉集評釈』（金子元臣）では「知る」と同義であり、領有する・支配するの意であるとされ、また『全

注』では「シクは占領する意で、ここでは宮殿を構えて住むこと」とされている。集中の「敷きいます」の用例を見るに、十四例中十一例が「国」「里」を目的格にとり「天皇の統治する国・里」という意味合いで用いられており、また明確に目的語を取らない場合でも、「荒野らに 里はあれども 大君の 敷きます時は 都となりぬ」(巻六・九二九)のように天皇による支配を示す。このような用法から考えると、「敷きいます」とはその土地を領有し治めるという意味にとらえられる。よってここでの「やすみしし我が大君」も、「敷きいます」という語と相互に響き合う形で選択された称であると考えてよいと思われる。

このように、「やすみしし我が大君」が統治・領有にかかわる文脈と相応じて用いられる讃辞であることは、「やすみしし我が大君 高照らす(高光る) 日の皇子」という四句が連続される三例に還元しても理解できるものである。

二、「高照らす(高光る) 日の皇子」

1、人麻呂作歌における「日の皇子」

人麻呂以前の「日の皇子」の用例は、古事記歌謡に五

例(二八、四七、七二、九九、一〇〇)みえる。歌謡における「日の皇子」は一例を除いて枕詞「高光る」を伴い、主に天皇への賞辞として用いられる。そのような伝統的な成句「高光る日の皇子」を踏襲・再生したものが、万葉集における「日の皇子」であると考えられている¹²⁾。

その中でも一六七は、人麻呂作歌中の「日の皇子」の初例と考えられ¹³⁾、また「やすみしし我が大君」と対にならない単独例としては唯一である。歌の構成・内容から見ても人麻呂の持つ皇統意識が色濃く反映された一首として注目できるので、まずは一六七における「日の皇子」の在り方から眺めてみたい。

A 天地の 初めの時の ひさかたの 天の河原に 八
百万 千万神の 神集ひ 集ひいまして 神はかり
はかりし時に 天照 日女之命(二に云ふ、「さし
あがる 日女の尊」) 天をば 知らしめすと 葦
原の 瑞穂の国を 天地の 寄り合ひの極み 知ら
しめす 神の尊と 天雲の 八重かき分けて(一に
云ふ、「天雲の 八重雲分けて」) 神下し いませ
まつりし 高照 日の皇子は 飛ぶ鳥の 清御原の
宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます
国と 天の原 石門を開き 神上り 上りいましぬ

「一に云ふ、「神登り いましにしかば」」：

（巻一・一六七）

当該歌における「日の皇子」は、従来、挽歌の対象である草壁皇子を指すという『萬葉集略解』などの説があったが、その直後に「飛ぶ鳥の 清御原の宮」とあることから、淨御原宮で政務を執った天武天皇を指すとするのが現在の一般的な解釈となっている。また、「八百万千万神」の「神議」によって降臨が決められるという「日の皇子」の登場場面は、天孫降臨を思わせる展開であることから、従来この「日の皇子」は、「天の八重雲をわけて降臨された天孫と淨の宮に宮居を定められた天武天皇とが『神下 座奉之』の句のところで二重寫しのやうになって、日の皇子がいつの間にか天武天皇となつたとみるべきだと思ふ⁽¹⁴⁾」と解釈されていたが、近年は、古事記・日本書紀の天孫降臨神話と一六七の文脈には相違が見えることや、古事記・日本書紀と和歌ではその在りようが異なるという視点から、天孫を持ち出すのではなく、一六七で描かれる「高照らす日の皇子」とは天武天皇その人であるとする理解が通説となっている⁽¹⁵⁾。

さて、ではその「日の皇子」は、いかなる目的のために一六七の中に配置されているのか。このことを考える

とき、前半部にみられる「天照日女之命」という語句が着目される（波線部）。「天照らす日女の命」と「高照らす日の皇子」たる天武天皇による天地の分治が叙述されており、「アマテラス」「タカテラス」というように枕詞に近似性が見られるため、両者が対比的に描かれていることは先学により指摘がある⁽¹⁶⁾。加えて「日の皇子」と「日女の命」の二者も、「日」という語を共通要素として持つ点で対比的である。

ヒルメとは、『時代別国語大辞典上代編』では「日の女神。特に天照大神をさしていることが多い」と説明される。万葉集ではここ一例だけだが、他の文献には以下の用例がある。

B 是に共に日神を生みたまふ。大日靈貴と号す。おほひるめのみこと
（略）一書に曰く、天照大神といふ。一書に云はく、
天照大日靈尊といふ。あまてらすおほひるめのみこと

（『日本書紀』巻第一・神代上 正文）

C 一書に曰く、伊奘諾尊の曰はく、「吾御宇す珍の子を生まむと欲ふ」とのたまひ、乃ち左の手を以ちて白銅鏡を持ちたまふときに、則ち化出づる神有り。
あまはひるめのみこと
是を大日靈尊と謂す。 （同右 一書第二）

D 如何ばかり 良き業してか 天照るや

ひるめのかみ
比留女乃加見を 暫し留めむ 暫し留めむ

(神楽歌・日雲女歌)

E 天照坐皇太神所称天照意保
比流賣命

(『皇大神宮儀式帳』)

B、Cでの「大日靈」は共に、日神である天照大神の別名である。Dは神楽歌の一つで少し時代は下るが、太陽のことを「比留女乃加見」と擬人化して呼ぶもの、またEは天照坐皇太神の別称である。このようにヒルメは、用例を見る限り太陽神という特定の存在を指す呼称であることが分かる。一六七では「日女の命」と「日の皇子」がそれぞれ天地を分治すると語られ、両者が一首の構成の中で対をなしていることを考えあわせると、「日女の命」が太陽神以外を指さないと同様に、ここでの「日の皇子」は天武天皇を指すために意図的に選択された呼称であつたととらえられる。「日女の命」「日の皇子」の両語は、天武天皇を天からの降臨者として語る一六七の文脈を形成する必須要素であると考えられ、当該歌における「日の皇子」は他の尊称(たとえば「やすみし我が大君」など)には代替不可能といえるだろう。太田豊明氏は、一六七における「高照らす日の皇子」が当表現の万葉集中での初出例であることから、「草壁皇子挽歌」においては、この『高照らす日の皇子』は天武を指

す呼称として用いられていた。というよりも、天武を指す特殊な呼称として用いるために、そこで人麻呂は『高照らす日の皇子』を作り出したのだった。『草壁皇子挽歌』における『高照らす日の皇子』は、人麻呂にとって、天武のために創出した、いわば天武に対する固有名詞のようにも意識されていた(後略¹⁷)と指摘されている。当該歌における「日の皇子」は天武天皇を指して代名詞的に用いられたというよりはむしろ、天武天皇その人を降臨者として描くために不可欠な称号であつたと考えられる。「日の皇子」の指命は、地上を統治することである。「神ながら 太敷」くという行動もまた「日の皇子」たる天武天皇に課されたものであり、「天降り、地上を治め、神上る」という一連の行動を担った人物こそが「日の皇子」であつたととらえられよう。

一六七における「日の皇子」という語が、このように歌文脈からの必然的な要請によつて選ばれたものであると見るとき、後の人麻呂作歌における、「やすみし我が大君」と対句をなす「日の皇子」(四五・二三九・二六二)も、その性格を色濃く継承していると考えられるのではないか。天武天皇を、地上統治のために天降った神の皇子であると定位するために用いられたのが一六七に

おける「日の皇子」という称号であり、その用法は一六七固有の文脈から切り離せない。ならば、一六七以外に用いられた人麻呂の「日の皇子」も、多分に天武天皇その人を想起させる表現としてあったに相違ない。四五・二三九・二六一の「日の皇子」の指示対象はそれぞれ皇子・長皇子・新田部皇子であり、いずれも天武の皇子・孫である。「日の皇子」をこれらの歌の中に再び用いることによって、人麻呂は諸皇子が天武につながる人物であることを明示し、彼等の尊貴性を保証しようとしたのではないか。その意識は四五に最も顕著に現れている。当該歌は、天武皇統の後継者として軽皇子の擁立を急ぐ持統天皇の意図を反映して、幼い軽皇子の行動を超人的なものとして描く。渡瀬昌忠氏が、「日の皇子」を含む当該歌の冒頭表現について、「いま軽皇子は、新たな『高照らす日の皇子』として、さながら天武天皇の再来として、『神ながら神さびせすと太敷かす京を置きて』行動を開始するのである」と解釈されるように、

「日の皇子」という語がまだ年少の軽皇子の賞辞となり得たのは、表現の背後に、一六七に示されたような、最初の地上統治者としての天武天皇の姿があるからであろう。二三九・二六一での「高光る（我が）日の皇子」も、

四五と同様に、長皇子や新田部皇子の背後に天武の英姿を透かし見せる役割を果たしているといえるだろう。それが結果的に、皇子らへの讚美につながるのである。

もつとも、長皇子や新田部皇子が天武天皇に匹敵するような地位や処遇にあったとは言い難く、四五の軽皇子の場合とは完全に同一視できない。両者の格差は、「高照らす」「高光る」という枕詞の違いによって表出されていると考えられる。

2、枕詞「高光る」と「高照らす」について

「日の皇子」にかかる枕詞には「高照らす」と「高光る」があり、人麻呂作歌においてもこの両方が用いられている。「高光る」は歌謡にも用いられるが「高照らす」は出現時期が持統朝に限られており、またはじめに用いたのが人麻呂であると思しきことから、伝統的な「高光る」に加えて、人麻呂によって「高照らす」が創造されたというのが通説である⁽¹⁹⁾。

現在「高照らす」の「す」については、尊敬の助動詞とする説と、他動詞照らすの一部とする説がある。前者は本居宣長以来支持され、これを「日の皇子」と称される人物に対する畏敬の念の表れとして説く桜井満氏や、

君臨を表す語としての敬意の高まりを指摘する稲岡耕二氏らによって深められた。⁽²⁰⁾これらの敬語説に対し西宮一民氏は、「照る」には敬語助動詞「す」は付かず「ます」が付くという観点から、「照らす」は照るの他動詞形であるとされた。⁽²¹⁾ほかに、橋本達雄氏や吉田義孝氏が他動詞の立場をとっておられる。⁽²²⁾語構成については論が分かれるものの、「高照らす」は「高光る」に比べて敬意が高く、天下に君臨する天皇を讃美するのにふさわしいものであると結論づけている点では両者は共通する。

このような先行説をふまえた上で、「光る」と「照る」の語義差に注目してみたい。ただし、「光」は「ヒカル」「テル」と両方に訓まれるので、ここでは「照る」「光る」とも正訓の用例は考察対象から外し、仮名書き例のみを見ていくこととする。⁽²³⁾

【光る】

F 松浦川 川の瀬比可利 鮎釣ると 立たせる妹が
裳の裾濡れぬ (巻五・八五五)

G あしひきの 山下比可流 もみち葉の 散りのまが

ひは 今日にもあるかも (巻十五・三七〇〇)

H 大宮の 内にも外にも 比賀流まで 降らす白雪

見れど飽かぬかも (巻十七・三九二六)

これらの用例において、光っているのはそれぞれ「川の瀬」「山下」「白雪」であり、「光る」は、いずれもある物・場所が光を放つ様子という語であるといえよう。

【照る】

I 朝日弓流 佐田の岡辺に 群れ居つつ 我が泣く涙

止む時もなし (巻二・一七七)

J 見渡せば 向つ峰の上の 花にほひ 弓里氏立てる
は 愛しき誰が妻 (巻二〇・四三九七)

対して「照る」には、Jの用例のように「光る」と同義で使われているものがある一方で、Iのように「朝日照る 佐田の岡辺に 群れ居つつ」の「照る」のところを「光る」には置換できない、つまり「朝日光る 佐田の岡辺」とは言えない例がある。それは、「照る」が、光の作用の及ぶ到達点である「佐田の岡辺」を示すことができるのに対して、「光る」は指示できないからであるう。

このように、「照る」は「光る」と置き換え不可能な性質を持つている。「高光る」は、「光る」という語の性質から言って、「日の皇子」と称される天皇や皇子自身の威徳を太陽の光になぞらえて讃美するものであったと考えられる。一方「高照らす」は光の到達点を示し、光

り輝くものとして対象人物を賞讃すると同時に、照らされる側である国土や人民が暗示される表現だといえる。

「高照らす」の「す」が尊敬の助動詞であったとしても他動詞「照らす」の一部であったとしても、「照る」は主体の発する光の到達点を示すことができるという点で「光る」とは異なる。

本稿で問題とする三首（四五・二三九・二六一）において、二三九・二六一で枕詞を「高光る」として「高照らす」としなかった理由は、以上のような「照る」と「光る」の違いからも説明できるだろう。「高光る」が「日の皇子」の威徳を太陽が発光する様子になぞらえて称える表現であるのに対し、「高照らす」はその威徳の及ぶ対象が意識される表現であるといえる。その点で、橋本達雄氏の「タカテラスはタカヒカルより、いつそう天皇の威光が大きく臣下を覆って君臨する意を強調する語となっている」という指摘が首肯される。長皇子や新田部皇子は、天武天皇の子供であるという点では「日の皇子」というに相当する人物であるが、立場的には臣民にまで影響を及ぼす存在ではないため、「高照らす」ではなく「高光る」⁽²⁵⁾が用いられたといつてよからう。一方、四五の指示対象・軽皇子は草壁皇子の後継者として次期

天皇への即位が期待されていた人物であるため、当該歌では「高照らす」が用いられたのであろう。「日の皇子」と称される点では三者とも共通するが、立場の違いが枕詞「高照らす」「高光る」によって表出されていると考えられる。

三、四句連続表現の意義

ここまで、人麻呂作歌における「やすみしし我が大君」と「高照らす（高光る）日の皇子」について考察してきた。「やすみしし我が大君」は統治にかかわる文脈と呼応して用いられ、「高照らす（高光る）日の皇子」は、一六七において描かれる降臨者としての天武天皇の英姿を志向するものとして用いられていることが分かった。

ここで、当初の疑問に立ち戻ってみたい。人麻呂作歌における四句連続表現は、対象に対する最高レベルの待遇を表すものなのかどうか。見てきたとおり、「やすみしし我が大君」と「高照らす（高光る）日の皇子」は、一人の対象を異なった側面からとらえ讃美する表現であり、同質の讃辞ではないと考えられる。西條勉氏が六七の考察にあたり「日の皇子」を取り上げる中で、「やすみしし我が大君」と「高光る日の皇子」について「両

者はけつして同等には扱えないのである」とする指摘が重要である。⁽²⁶⁾両者が重ねられた「やすみしし我が大君高照らす(高光る)日の皇子」という表現が、単独のものに比べていっそう尊敬度の高い表現だとするよりも、「やすみしし我が大君」と「高照らす(高光る)日の皇子」とはそれぞれ一首の中で個々の機能を担っていると解釈しうるのではないだろうか。当該表現は皇族讃美のための表現の選択肢のひとつであって、対句をなすか否かは敬意の高さと直接的にかかわるわけではないと考えられる。現に人麻呂は、天武天皇に対して「やすみしし我が大君」のみを、また「高照らす日の皇子」のみを使用し(一六七、一九九)、持統天皇に対しても「やすみしし我が大君」のみを使用している(三六、三八)。天武天皇自身「日の皇子」でもあり、統治者として「やすみしし我が大君」でもあるわけだが、人麻呂作歌では、歌の主題に応じてどちらかが選択されていると理解できよう。すなわち、一六七中での天武天皇は特に「天照らす日女の命」との対応で「高照らす日の皇子」の方が表現上に表れ、一九九中では特に統治者としての「やすみしし我が大君」が表現上に表れているとみてよい。「やすみしし我が大君」と「高照らす日の皇子」が同時に詠み込ま

れていないからといって天武天皇への敬意を低めるものではないと思われる。持統天皇の場合も同様である。人麻呂作歌以外では持統天皇にも「日の皇子」を用いる例があるが(五〇、五二、三三三、三四)、人麻呂の吉野讃歌(三六・三八)では持統天皇は「やすみしし我が大君」とのみ呼ばれ、「日の皇子」とは称されない。しかしだからといってこれらの歌における冒頭表現が持統に対する敬意を低めるものでないことは、その後に続く「神ながら神さびせすと」という形容からも容易に想像できるだろう。このことに関しては、伊藤博氏が「日の皇子」について一六七と一七一・一七三の例をあげ、次のように指摘されるのが興味深い。

(筆者注)「やすみしし我が大君」と、対句になつていないのは、対句になつてゐる場合より一見軽いように感じられよう。しかし、一六七の例は、天武天皇を高天原から直接天降りやがて天界に上つた神として扱う文脈の中でのものである。草壁の二例も、その神天武のじきじきの皇太子という強い意識から用いられたものであらう。すなわち、「高照らす日の御子」とのみ言う方がむしろ神威の程が高い表現であつたと推測される。

対句になっていない場合のほうが「むしろ神威の程が高い」かどうかはひとまずおくとしても、少なくとも対句をなすことと指示対象への敬意の高さが必ずしも比例しないという指摘は重要であろう。人麻呂が当該句を用いたのは、対象に対するより最高レベルの待遇度を求めたからというよりは、表現それぞれの特質を活かして対象を二方面から讃美するためであったととらえられる。

以上のように考えると、二三九・二六一において天皇に準ずる位にない長皇子・新田部皇子に対して当該句が用いられていることも、納得しうるであろう。

最後に、当該詞句が第二期のみに現れることの意味に言及しておきたい。従来、「日の皇子」が万葉第二期のみに見えてその後姿を消すのは、天武・持統朝における天照大御神信仰と、それに基づく「日の思想」の興隆と衰退によるものであると捉えられてきた。⁽²⁸⁾ただ、思想の興隆とある表現の出現とは、必ずしも同時に起こるわけではない。「大君は神にしませば」や「神ながら神さびせず」という表現も天武・持統朝にのみ現れるものであるが、それは、天皇を神と結びつけるためにはまだ、言葉による根拠づけが必要であったからだと考えられることを、筆者は以前述べたことがある。⁽²⁹⁾このことを参看す

るならば、思想が興隆したから表現が生まれたというよりはむしろ、思想が興隆途上であり、それを定着させる必要があったからこそ、「天武天皇こそが正統な王朝の始祖である」という「言挙げ」――すなわち「日の皇子」という表現――が有効に機能したのではなからうか。「日の皇子」の在りようは、西郷信綱氏のいう「そうした無力さ（筆者注：自然に対する人間の無力さ）をことばの靈力がカバーしていた」⁽³⁰⁾といった、詩のことはと現実の關係から位置づけることができるように思う。

そう考えると、万葉第三期以降に「日の皇子」が消えるのは、「日の皇子」という語による根拠づけを必要とせずとも、天武朝が正統な律令国家の始祖であるという認識が定着したからであろう。歌、ことに宮廷儀礼歌における表現が、現実を保証するものとして機能している一端をここに見ることができる。

註

- (1) 木村康平氏「安騎野の歌」（橋本達雄編『柿本人麻呂《全》』笠間書院、二〇〇〇年六月）
- (2) 稲岡耕二氏の「長皇子讃歌は人麻呂晩年の作か―表現を考える―」（『小島憲之博士（古稀記念論文集）古典学藻』塙書房、一九八二年十一月）では「大君讃仰の慣用句」とあり、また辰

已正明氏の「遊獵の讃歌」(『万葉集と中国文学』笠間書院、一九八七年二月)では「皇子を帝王讚美に等しく讚美する典型的な献呈呪歌の表現様式」とされている。

- (3) 吉田義孝氏「忍壁皇子論」(『柿本人麻呂とその時代』第七章、桜楓社、一九八六年三月)

- (4) 『万葉集古義』金子元臣『万葉集評釈』、窪田空穂『万葉集評釈』が「安らかに知らす」意とし、日本古典文学大系、新日本古典文学大系、日本古典文学全集、新編日本古典文学全集が「八方を知らす」意とする。武田祐吉『万葉集全註釈』、土屋文明『万葉集私注』、澤瀉久孝『万葉集注釈』は、二説あることを挙げた上で判断を保留している。

- (5) 橋本達雄氏「やすみしし我が大君」考(『万葉集の時空』笠間書院、二〇〇〇年三月)

- (6) 二〇二は一九九の或書反歌であり、左注にいうように檜隈女王の作である可能性が高いので、今は人麻呂作歌の例としては扱わない。

- (7) 『古事記』『日本書紀』の成立は人麻呂よりも後になるが、収録されている歌謡はひとまず人麻呂以前のものとみなして考察対象に含めた。また、「やすみしし我が大君」という称の成立時期については本稿では直接問題としないが、注(5)橋本氏論文では、「やすみしし」という称号は推古朝に入ってから律令制度の確立とともに新しい宮廷賛歌にふさわしい語句として登場したこと、したがって歌謡にみえる「やすみしし我が大君」の称は推古朝以降に付加・挿入されたものであると考えられるこ

とが述べられている。

- (8) 澤瀉久孝氏「枕詞を通して見たる人麻呂の独創性」(『万葉の作品と時代』、岩波書店、一九四一年三月)

- (9) 岩下武彦氏「人麻呂の枕詞試論」(『柿本人麻呂作品研究序説』若草書房、二〇〇四年二月)

- (10) 内田賢徳氏「狩りの歌・巫女のことば」(『万葉の知—成立と以前—』塙書房、一九九二年七月)

- (11) 注(2)辰巳氏論文参照。

- (12) 阿蘇瑞枝氏「宮廷讃歌の系譜」(『柿本人麻呂論考』おうふう、一九九八年三月)、戸谷高明氏「日の皇子」と『天の日嗣』(『古代文学の天と日—その思想と表現—』新典社、一九八九年四月)参照。

- (13) 「日の皇子」の用例のうち、制作年代の分かっているもののうちで一番古いものは一六七(持統三年)であるが、その他製作年代の不明な歌の中でも、二三九の制作年が一六七のそれよりも先行するであろうという注(2)稲岡氏論文の指摘がある。

稲岡氏は主に、二三九の冒頭表現が「高光る 日の皇子」であることに注目される。氏は、両者の間に成立と使用時期のずれを見出し、日の皇子の枕詞が「高光る」から「高照らす」へと改変されたことを述べられ、古い方の「高光る」を持つ二三九は、「高照らす」を持つ一六七や四五に先行するであろうことを示されている。

氏の論は十分考えられるものであるが、「高光る」と「高照らす」が併用されていたと考えられることも一方で可能である。二―2で考察した通り「高光る」と「高照ら

す」はその語義差ゆえに使い分けられていたと考えられる。そう考えると、橋本達雄氏にすでに指摘があるように（『タカヒカル・タカテラス考』（『万葉集の時空』笠間書院、二〇〇〇年三月）、「高照らす」が創造されたあたにも「高光る」を使った可能性はあるといえよう。

また、もし二三九が一六七に先行するとすれば、人麻呂は「日の皇子」たる称号を長皇子に対して初めて用いたことになる。長皇子は政治の表舞台からは一歩引いた存在であり、その意味で「日の皇子」を用いて讃美される必然性が見出しにくい。また、以後人麻呂の「日の皇子」は天武天皇の皇子と孫に限定して用いられているのであるが、このことも説明しにくくなる。そう考えると、二一で述べたような一六七の構成とそこに描かれる日の皇子の在りようが注目できると思う。すなわち、一六七における日の皇子とは、天武天皇を降臨者として讃える称号として持ち出されたものであり、一六七が語る文脈に沿って選択されたものと思しい。そうすると、一六七で人麻呂の表現体系の中に取り入れられた「日の皇子」の称が、天武天皇の血脈を受け継ぐ者へと使用されていったと考える方が、人麻呂における「日の皇子」の使用対象の偏りを説明できると思われる。前掲橋本論文が「タカテラス」の必然性という観点から、二三九で高照らすと歌いはじめたとする必然性は、日並皇子挽歌で天照らすとの関係から対比的に高照らすを創案したと考える必然性には及ばない、と指摘するが、「日の皇子」そのものの必然性という観点から見ても、一六七は二三

九に先行すると考えられるのである。

以上のような理由から、本稿では二三九より一六七が先行するという立場で論を進めたいと思う。

- (14) 澤瀉久孝『萬葉集注釈』。他、『萬葉集全注』、新編日本古典文学全集『萬葉集』、『萬葉集釋注』が同じ説を採用する。

- (15) 神野志隆光氏「神話テキストとしての草壁皇子挽歌」『古代天皇神話論』若草書房、一九九九年十二月、毛利正守氏「人麻呂の皇統意識―近江荒都歌と日並皇子挽歌、それ以前を視野に入れて―」『上代文学』八七号、二〇〇一年十一月参照。

- (16) 遠山一郎氏「草壁皇子挽歌における天武天皇の形象」『天皇神話の形成と万葉集』、塙書房、一九九八年六月、橋本達雄氏「天地の初めの時」『万葉集の作品と歌風』、笠間書院、一九九一年二月参照。

- (17) 太田豊明氏「柿本人麻呂『安騎野の歌』考」『上代文学』第七五号、一九九五年十一月。

- (18) 渡瀬昌忠氏「安騎野の歌」『セミナー万葉の歌人と作品』第二巻 柿本人麻呂（一）、和泉書院、一九九九年九月。

- (19) 注(2)稲岡氏論文、注(13)橋本氏論文など。

- (20) 桜井満氏『万葉集』四五歌補注（旺文社、一九七四年一月）、注(2)稲岡氏論文。

- (21) 西宮一民氏「古事記『天照大御神』考」『古事記の研究』おうふう、一九九三年十月。

- (22) 注(13)橋本氏論文、注(3)吉田氏論文。

(23)

「照」字の訓は、万葉集・古事記・日本書紀の諸本を見る限りでは「テル」「テラス」に固定しており、異同がない。このことから、「照る」に関しては正訓の用例も考察対象となり得る。以下、その考察結果を記しておく。

・朝日照^{あさひ} 島の御門^{しまのみかど}に おほほしく 人音もせねば
まうら悲しも (『万葉集』巻二・一八九)

・此地は韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通^{まきよとほ}りて、朝日の直刺^{ちくし}す国、夕日の日照^{あさひ}国^{くに}ぞ。

(『古事記』上巻・天孫降臨)

・此の子光華明彩しく、照^{あさひ}徹^{とほ}於^お六^む合^{くわ}之内^{のうちに}」 「六合の内^{ろくごうのうちに}に照り徹る」 (『日本書紀』巻第一・神代上)

それぞれ、光の到達点として「島の御門」「国」「六合の内」が示されており、正訓の「照る」においても仮名書き例と同様、光の及ぶ対象や場所を提示できる語であることが確認できる。

(24)

二六一では、「高輝^{たかひかり} 日之皇子^{ひのみこ}」とある。この「高輝」は、旧訓では「タカテラス」(『萬葉考』など)、近代に入って『萬葉集新考』『萬葉集講義』などでは「タカヒカル」と訓まれていた。橋本達雄氏は注(13)論文で、『古事記』・『日本書紀』・『文選』・『玉台新詠』の用例を検討され、「輝」はヒカリ・カガヤキと訓むことから「高輝」はタカヒカルと訓むのが妥当であろうと指摘された。また現在は、新編日本古典文学全集、新日本古典文学大系、『萬葉集釋注』、『萬葉集全注』でもすべて「ヒカル」を採っているの、これに従い、「タカヒカ

ル」と訓む。

(25)

注(3)吉田氏論文参照。

(26)

西條勉氏「ヒルメとヒノミコの神話」(『古事記と王家の系譜学』笠間書院、二〇〇五年十一月)

(27)

伊藤博氏『萬葉集全注』巻第一(有斐閣、一九八三年九月)

(28)

注(12)阿蘇氏論文、注(12)戸谷氏論文。

(29)

拙稿「『神ながら神さびせず』考―表現意義と機能、萬葉集における位置づけをめぐって―」(『萬葉語文研究』第2集、二〇〇六年三月)

(30)

西郷信綱『詩の発生』(未來社、一九九四年四月)(川崎医療福祉大学専任講師)